

五輪塔の成立発展を考える

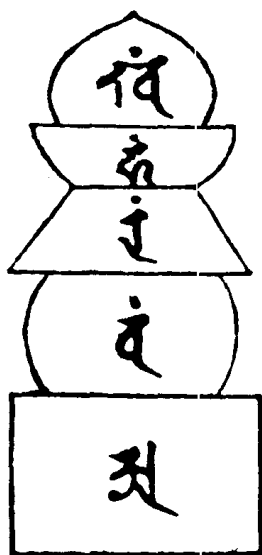
和田謙寿

日本の墓石の中で歴史的に一番長い年月にわたって存在し、多くの人たちの間に愛好せられたものは、なんとと言っても五輪塔に勝るものはないであろう。平安時代後期を頂点として鎌倉時代に普及し、室町時代には更に発展をなし、安土から江戸時代中期にかけてはわが国一円に分布した。江戸時代中期から現代においては角碑ほどの発展には及ばぬものの、それでも墓地の各処において見られるまでに至る大衆的な墓碑となったのである。角碑の中に疎らに存在する五輪塔の姿は如何にも慕情あふるる魅力を有している。二十年来墳墓を追い求めている私にとっても、他の墓石に比して五輪塔に対しては特別な愛着を感じるところの一人である。ここに五輪塔の成立発展をめぐる二・三の問題について、従来の碩学の説を参考にして考察して行きたいと思う。

一

二

五輪塔は言うまでもなく、五大の思想を依りどころとしてつくられたところの卒塔婆であり、空・風・火・水・地の宇宙観を表わした五元素より構成されている。空輪の宝珠・風輪の半月・火輪の三角・水輪の円・地輪の方形は、それぞれ



五輪塔は平安時代の後期にあらわれた様式の塔でその後卒塔婆とならんで、最もさかえたところの塔形である。上部より、キヤ、カ、ラ、バ、アの梵字がぎざまれ、真の墳墓としての意義をあらわしたものとされている。

万物構成の要素であり、この塔形をして胎藏大日如来の三昧耶形としている。つまり密教においては、水輪の円と地輪の方は本体（実在界）の姿であり、宝珠形の空輪と半円形の風輪・三角形の火輪は変体（現象界）の姿であって、常住不変の実在界の上に变化極りなき現象界を配したものであるとしている。五大は万物・万法の根源であり、これを具現しているところの五輪塔も法身の真身を表現するものである。われわれの五体も覺鑊の五輪九字明密釈中に述べられている如く、五大の所域に外ならぬがために、五輪即五体の觀を解せしむるのである。弘法大師は五大に関して「法界の⁽¹⁾実相は恰も大地の如く三世常恒にして不壞のものであり、水が一切の垢穢を洗淨する如く一切の妄想戲論を洗淨し、火の塵垢を燒淨する如く一切の煩惱を離れ、風の一切を動かす如く絶対の活動を有し、虚空の無碍なるが如く無碍自在である。」と、眞言の上に立ちて五大を説いている。

更に五大の上下の配当につき触れて、「第一は五大の性質で唯、地・水・火・風・空の五大を上方から作ったのでは如何にも不安定である。五大を實際宝瓶に当てはめるには、五大が自然に存在する如く、空・風・火・水・地瓶に当てはると重さの順序に重ねることに気づく。このことは唯、文学的教養があつて工作上の思索のない人から見れば、付会の説のように考えられるかも知れないが、これこそ実に理念の鉄則であるから、

五輪塔の成立發展を考ふる（和田）

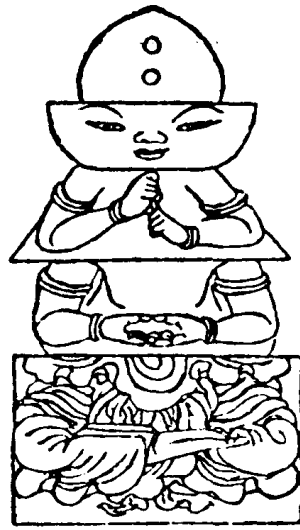
五輪塔の五大を配する際、五大を重さの順に重ねることに気が付いたとき、それが五輪塔の創作を意味する理念になると思う。」と、五輪塔の創作意義との深い関連性についてを述べている。その他五輪塔は、五輪の各輪に⁽²⁾事よせて、五行の（木・火・土・金・水）をはじめとして、五色（青・黄・赤・白・黒）五味（甘・酸・鹹・苦・辛）五音（宮・商・角・徵・羽）五部（金剛・蓮華・宝・羯磨・虚空）五智（法界・大門・平等・妙觀・成所）五仏（大日・阿閼・宝生・弥陀・不空）五方（中・東・南・西・北）五蔵（脾・肝・心・肺・腎）等の万有の根元はすべてこの五輪の中に帰納されるとしている。もちろん内容的には遠く印度に起つたものや、唐代または宋の頃、中国で、または日本で配当されたものもある。

現在五輪塔はわが国の塔として誰しも認めているところであるが、この源流に関しては諸説紛々として未だその定まる⁽³⁾ところを知らぬ現状である。いずれかと言うに日本創成説をもってその主力を占めているようであるが、佐々木利三氏は昭和十六年に竜谷史壇二十八号「五輪塔の成立」において、五輪五大の思想は既に大陸にあつたが、塔としての成立は密教の渡来以後、覺鑊の五輪九字明密釈の著作年代前後を中心に、わが国において造成されたものであると、遺物の形態と年代を通して考察せられている。氏は巧みな表現により、⁽⁴⁾「五輪塔の起原は当然大陸にあるだろうことは誰しも想像す

る所であるが、未だ的確なる遺物に接しないので、むしろ我が国に密教が流入してから、我国で創案されたものと認められる。もっとも五大思想は既に大陸にあり、その五輪としての型式の独立、固定だけが我国でなされたものであろう。……恐らく空海に依って密教が、真言宗として成立したのと等しく、空海以後の或時期に我国に於て、五輪塔形が成立したものと考えるのが穏当なのではあるまいか。」と述べ、五輪塔がわが国において発想せられた事を暗示されている。この点につき川勝政太郎氏⁽⁵⁾は昭和十六年に古代文化十二の六号「平安時代の五輪石塔」において、「五輪塔は、密教系のものとして最初現われたもので、平安時代に入ってより存在する塔形なること、既に先覚の言はるゝ如くである。しかし、この塔形の形に現はされたものは我国に始まるらしく、朝鮮、更に支那に於て未だ此の塔の塔形の遺例の見出されたものあるを知らぬ。さればとて、所謂五輪塔形の因って来る原流に就いては、教理的には勿論、形態の上にも大陸との関係を無視出来ぬと思ふものであるが、これは今後に残された問題としてここには触れない。」と述べ、学者としての慎重さを含みつつも、五輪塔の日本創成説を留意せられているように感じられる。氏は更に、五輪塔形の構成に触れられ、舍利を安置する塔身を中心に、基礎・笠・宝珠が付随した宝塔形に五大思想が加えられて五輪塔形がかたち造られたのであるとし、

「京都市岡崎⁽⁶⁾の廃寺法勝寺跡より発見された軒先瓦や軒平瓦の瓦当に現はされたものが現在知られるものの中では最も古いやうである。此等の瓦は保安三年(一一二二)に建立された法勝寺小塔院の屋蓋に使用されたものと考えられて居る。その形状二種あり、水輪が円形に近きものと、その上方に首部を造って火輪を受けてあるものがある。前者は明らかに五輪塔であるが、後者は寧ろ一重の多宝塔に近い形式である。この首部を有する塔も、他の部分は五輪塔の地・火・風・空の形をしているので、五輪塔と考へられぬこともないが、厳密に言へば何れとも俄かに断定し兼ねる。……型式学的に見れば、ここに謂はゆる五輪塔形の成り立ちを見るべきことを示唆するものがあるやうにも思われるのである。即ち五輪塔なる形は、平安時代中期頃になって定型化したものであらうと言ふことを思わしめるのである。」と綴られている。これに対して藪田嘉一郎氏の説を披瀝してみよう。氏は五輪塔に至って広い立場より追求され、印度や中国における五輪図形の紹介、塔婆と五輪図形との関係、塔婆とピラミッド、五輪図形と五大象徴図、真言念仏と五輪塔、五輪塔の原始形態などについて具に考察されている。特に「坐位のミイラと五輪図形」との関連性において左記の如く論述され、「坐位のミイラが現実にあることは明らかであるが、仏典に多宝仏や弥勒菩薩の全身舍利が結跏趺坐して禪定に入るが如しとあるの

も、古代の坐位ミイラ製法のトラディションを反映しているものである。この坐位ミイラから五輪図形が出たと私は考えるのである。つまり坐位ミイラの形を簡略化して、これを幾何学図形にすると、五輪図ができるというので、膝の部分が地輪、胴体の下部が水輪、胴体の上部と腕が火輪、顔が風輪で、髪際以上の頭部が空輪となったものと思う。……この人



坐位ミイラ型
五輪図形

体各部にあつた五輪の名を頂輪・面輪・胸輪・腹輪・膝輪と言う。」とある。更に

は、大日如来⁽⁸⁾の座形が五大思想を現わし、やがて五輪塔形が生じた如き感をもつて説かれて⁽⁹⁾いる。この点、跡部直治氏も述べられている「密教の教義に従へば、五大は万法の根源である本有の実体なれば、之を具顕せる五輪塔は法身の体即ち大日如来の真身を表はすものと説く。而して吾々凡夫の五体も畢竟五大の所成に外ならねば、人間の肉身と大日如来の真身とは無差別等同である。故に五輪塔はまた吾人の五体そのものであると解釈されている。」と言う立場と似通っている点がある。更にまた、わが国五輪塔の形成としては、宝塔と

五輪塔との因果関係⁽¹⁰⁾を説明し、「醍醐伝来の五輪塔は恐らく例の三角五輪塔で、その形に昔のエムブレムの倂をとどめ、理論的には肯れるものであつても、立体的な工芸品としては、安定を欠くものであつた。それが今日見る藤原末期・鎌倉初期の五輪石塔の遺品のような工芸美術的に完好の作品になつたのは、これが高野山で宝塔の形と合体したからであると思ふ。従来五輪塔と宝塔とはその形態において密接な関係があり、前者が後者よりデリヴェーションしたと謂われているが私はそれよりも両者が合体したと主張するものである。宝塔は前述のように五輪を以て観ぜられているが、これが形態的に五輪形に近寄つたのである。一方五輪塔は宝塔化して安定した美しさを發揮することになった。これを具体的に言うと、五輪塔の地輪の高さはずっと低くなって安定感を増し、宝塔の基礎と通じるものになり、次に水輪は壺形となり、宝塔の軸部に通じるものとなり、火輪は四角錐形に復帰し、軒口が造られ軒反りができて宝塔の屋蓋に通じるものとなり、風空輪は宝珠・請花化した。一方宝塔にあつては、相輪がなくなり、屋蓋が便化し、軸部が球形化し、基礎が幾何学的図形化した。ここにおいて五輪塔的宝塔ができ、宝塔的⁽¹¹⁾五輪塔ができたのである。現在、五輪塔のような宝塔の遺品が見られ、宝塔のような五輪塔が見られるのはこのためであると思ふ。尤も宝塔がこのように五輪塔化したというのはい部の真言宗

系に限るのであって、天台宗系では宝塔は古来の姿を保持したのである。」と、川勝政太郎氏の説を引用考察なされているようである。結果的に見て藪田嘉一郎氏の主張は、五輪塔の思想的故郷としては印度や中国方面に求められるも、五輪塔そのものの創成は日本によるものであるとの主旨に感じられる。更に村田治郎氏⁽¹¹⁾は昭和三十三年綜芸舎版・古史叢刊Ⅰ（史迹と美術二十七輯七号）「五輪塔の形の起原」において、五輪塔の出現をグプタ時代以後のストウーパより発展し、更にまた、中国チベットの古式ラマ塔に類似しているところがあり、この形態にヒントを得て五輪図が作製され、それが日本にて立体化して日本独自の五輪塔が創作せられたのであると述べている。「五輪塔⁽¹²⁾は日本で創作されたと言わざるを得なくなる。その場合に經典の五輪図は平面的な線描であるから、板塔婆のようなにはそのままの形が用いられるが、石造や金銅製の五輪塔に対しては線描形を立体的に翻案しなければならぬ。翻案者はその原形がストウーパということを知っていたとしても、インドのストウーパ形を知らなかったもので、その時の手がかりにしたのは、石造などの宝塔形であって、三角形の火輪を、はじめは四角錐体としたが、それは落ちつかぬから、だんだん四角の宝塔形屋根形にしたものと考えられる。従って日本の五輪塔は軒先が厚く、屋根が反って曲面になるなど、五輪図の火輪とは甚しく異なった姿になった。

そのために一層インド系のストウーパ形から離れてしまったのである。」と、論述され、独自性のある日本的な五輪塔の存在起原を主張せられている。

もっともこの場合、中国にかかる塔の遺例の無き場合の事であり、若しも今後存在せる場合には多少の訂正をせねばならぬと、特に付加えられていることに注意を要する。石田茂作氏は昭和十八年、富山房発行の国史辞典（ごりんのとう）の項目において、「その起原は詳かでないが、宝蓋を具する舍利瓶の形に則とり、その各部に地水火風空の五大思想を当て嵌めたものと思はれる。五輪五大に關しては密教儀軌に既にあるが、これを塔婆と結びつけたのは大体藤原時代末期と察せられ、保安三年造立の法勝寺鍍瓦文様に見えるそれは恐らく五輪塔として最古の形であろう。」と。五輪塔の日本創成説をほのめかしていられる。もっとも、昭和十八年発行「塔婆の研究」において「我国に於ける塔形の種類と其の系統」の項にて、印度の古塔と比較検討なされているところを見ると、その思想的原流に対しては国外に求めべきものを示唆されていくようである。つまり、次に引用せられている論述が、それを思わしめるところの内容であろう。「宝瓶塔⁽¹³⁾は印度古塔の調和的形態の、舍利瓶への聯想によって案出されたものと思はれ、五輪塔も又その同じ系統中に置かるべきやうに考へらる。印度の塔の基壇上に覆鉢を構へ、その頂に平頭をお

いた姿は、之を側面より望むとき平頭を頸部とする瓶形の輪廓をしめす。この事は覆鉢内に蔵さるべき舍利瓶への聯想によつてより瓶の形をとり得る事は考へらるるところである。是れ瓶の上に蓋を開いた宝瓶塔の形を作るに至らしめたのではあるまいか。而して五輪塔がこの同じ系統を汲むものであらう事は、五輪塔の初期の形に於いて地輪が低く水輪が下膨れで頸を存する事によつても察し得らるる様に思ふ。即ち低き地輪は基壇を意味し、水輪の下膨みは覆鉢の制を伝へるもの、その頸部は平頭の名残ではあるまいか。」と、述べられている。その他、石田密豊氏は、一九五七年「ミウジウム」四月号、「三角五輪塔考」の五輪塔の始源の章において、中国創成説を述べられている。つまり、「宝悉地成仏陀羅尼經中の「可安置五輪塔……」の文章を引用し、經文中の五輪塔という語はきわめて注目すべきもので、五輪の思想が唐代以前にすでにあり、その形象も観念的ではあるが明らかで、人体にも関係せしめているから、これが現在の五輪塔に移行することは甚だ容易である。」と主張されている。更にまた五輪塔印度(大陸)創成説の齊藤彦松氏の立場も見逃す事は出来ない。氏は昭和三十二年に日本印度学仏教学研究「仏教美術にあらわれた古代婆羅門教祭火炉形の美術史的研究」の項目中において、五輪塔の成因ならびにその形式は、印度において仏教以前に既に存在した旨の報告をなされている。その論

五輪塔の成立発展を考える(和田)

旨を掲げると、次の如くである。「五輪塔⁽¹⁵⁾、之が成因は、形式内容ともに仏教以前の婆羅門教の中で生育した。形式は祭火炉で、内容は五大思想である。吠陀時代成立の多神を梵書の頃に統一しようとして梵なる概念を生んだ。奥義書時代には更に明確化し、世界現象の根源とも考えられて来る。梵が生命、物質、神を顕現する事に拠つて世界が成立したとし、其の内、物質を更に分類して、地水火風空の五大要素を生むに到った。みられる一切の物は五大から成立すると考えた。一度五大思想成るや印度哲学の殆んどに採り入れられ、更に極微さえ生むに至った。仏教も五大思想を受容し、之を大きく育てた事は多言を要しない。……此の五大と祭火との接近は、地水火風空の各々に、五火の炉形が対応される迄に結合して仏教(密教)に受継がれる。奥義書の地水火風空に梵が宿るとの考え方は、密教の悉皆成仏思想に可能性を与えている。密教に於て地水火風空に、護摩の方・円・三角・半月・蓮華(二葉形)の名炉形が配され、五輪塔が形成されて、それを大日如来ともされた。五輪塔は宝悉地成仏陀羅尼經、慈氏菩薩略脩愈識念誦法等に、其の名称、図形が明示されている。五輪塔は七世紀頃に印度に於て成立したものと推定する。」と。この論旨に対して藪田嘉一郎氏⁽¹⁶⁾は痛烈な批判を為しておられる。

つまり、「五輪塔の思想的内容が五大思想であることは誰

でも言っていることで不思議でなく、その部分的な形がバラモンの祭火炉形から来ているというのは、その形が両方似ているというだけでは、たとえ其の間に思想的相関関係を認めても、炉から直ちに五輪塔が生まれたということにはなるまい。また五輪塔が七世紀に印度で成立したというのも具体的な証拠は何一つないのであるから人を納得せしめるに足りない。」と。

私も数年前に泰国の南西部にて五輪塔に類似した塔を、また、インドネシアのボロブドールの仏蹟の石造壁画の中に、或いは朝鮮において、宝塔とも五輪塔とも似通うような塔を見かけた事がある。これが印度の方面より伝播されたものなのであろうか。それとも当地にて醸し出されたものであろうか。その点はハッキリとしないが、このような場合の判断は実にむずかしいものである。教理的な立場、史学的な立場、臨床学的な立場によってその解釈は多少異なるかも知れぬが、互に真意は有することであらう。池上年氏は一九六六年に「旭村古石塔の根元⁽¹⁷⁾」と言う著書中、「五輪塔出現前後の伝統を思う。」との標題のもとに、「五輪塔出現に関して、その祖形を大陸に求めることは当然であるが、その考え方はそれぞれ異なっているであらう。五輪塔そのままの形が中国にあるかもしれない。唯形が五輪塔に似ているだけなら、印度にも認められる。それ等の稀有の存在が我が国の五輪塔の祖形

となつていと考へる人もあるかもしれない。また五輪塔の出現を宝瓶塔からの移行と見るならば、大陸において領き得る実証資料の遺存することを立証する必要があるであらう。中尊寺願成就院に存する原始五輪塔の発生までは理解できる。しかしそれは火輪以上のことで、五輪塔の火輪以下が球形であることは、そこに飛躍を感じる。ところがこの不可解なる問題を解釈する参考資料に供し得るものが、朝鮮金剛山に遺存する石塔に認められる。しかしこれ等の石塔と我が国のそれとの類似点に立脚して直ちに両形式の関係を云々しようとするものではない。大陸における造塔思想の変遷と我が国のそれとを、大きな浪のうねりの中から區別しようとするところが狙いである。」と述べ、その根原をわが国にのみ固定して考へるのは疑問であるとの立場をとられている。また更に齊藤氏は唐代成立の立体五輪塔の存在を、昭和三十三年日本印度学仏教学研究「唐代五輪塔の研究」中に輪述されているので、引続きここに引用参照してみよう。『唐代密教に於ける卒都婆の形式、唐代及日本密教に重要な地位を占めた儀軌に「破地獄三種悉地法」（「破地獄軌」と「三種悉地軌」）がある。「破地獄軌」に「卒都婆」を説明して「鑿字变成卒都婆。方円三角半月団形。地水火風空五大所成故。此卒都婆变成摩訶毘盧遮那如来。」と記している。……従つて唐代密教における「卒都婆」とは現在日本で「五輪塔」と称されているもの

である事が明解される。……不空訳「宝悉地成仏陀羅尼經」⁽¹⁸⁾に、舍利塔として次の順序で五種の形式を掲げている。五輪塔・多宝塔・三股塔・五股塔・独股塔で、此の内初出の「五輪塔」の形式は明示してないが、他の四種の形式の外に五輪塔なる形式を推定するならば、唐代密教には前述した「卒都婆」と同一形式のものに、「五輪塔」なる形式名称も用いたと解せられる。同じく不空訳なる「供養十二大威徳天報恩品」にも「五輪塔」なる語が用いて在るところから、不空系での「五輪塔」と、善無畏系の「卒都婆」とは同一形式の所謂五輪塔で在ったと解する。両系密教を融合せる日本密教で、平安初期に既に、「毘盧遮那五輪卒都婆」(安祥寺資財帳)なる名称の存した事に拠っても知られる。』と述べられ、昭和三十五年の日本印度学仏教学研究第八卷第一号「五輪塔内容」と系列の研究」の項目においてはその結論として、「インドに於ける五輪塔成立の基本内容である五大は中国・日本に於ても常に五輪塔の基礎的内容であった。インドに於て五大(輪)の神格視、神聖視、根源視が遂に五輪塔を生む原動力となつたものと推定され、最神聖なる祭火の象徴である祭火炉の形式を得て塔形が成立された後も、五大を基本内容とする事には変わり無く、其の五大の神格化が上述の如き信仰内容の具体表現となつて来る。是等の間接的⁽¹⁹⁾五輪塔内容は、其の土地、其の時代の仏教的信仰内容、究極神聖概念を吸収しつつ展開

五輪塔の成立発展を考える(和田)

して今日に及んでいる。五輪塔は平安初期に日本に流入したと推定されるが、平安期に初出する五輪塔の内容は、密教々義的解釈に拠るものが其の主要を占め、鎌倉期以降は次第に庶民信仰内容に移行し、単に密教宗のみのものでなく、仏教一般のものとなつてゐる。其の五輪塔に表現された庶民信仰内容がインド以来の系列下に在る事に留意したい。』と述べられ、氏は、印度と共に、唐代密教にも五輪塔の存在していた事を日本における資料を引用比較して、その証明に努力せられてゐる。しかし学会全般の風潮から言つて現在のところ、五輪塔の印度・中国創成説は少早と言わざるを得ない現状にある。もつとも、松本文三氏や八木奘三郎氏などの各位が明治から大正年代にかけて国外説の裏付をなされて来たが、現在のところ、印度や中国、朝鮮などにハッキリとした立証すべき現物が殆んど少ない事によるものである。その祖形となるべき五輪塔的なるもの、または、五輪塔の思想的な背景をもつと思われる五輪図形は国外にも存するところであるが、立体的な塔としての独特なる五輪塔は日本で創成されたと思われるふしが高いと言う事である。齊藤彦松氏の「五輪塔の事」に既に密典に形及び名称が見られるところであるが、その塔形が一国を仏土化したと言つて良い程普遍化したのは日本国のみである。』と言ふ発言も、斯かる処より意義づけられた言葉であろう。しかしあくまでも五輪塔の各論を眺めた場

合、印度や中国、朝鮮などの石塔と似通うところも見受けられるので、部分的には彼地の影響を大いに受けている事は確かな事である。外形的に見て五輪塔が他の仏教的諸塔と異なるところは、九輪をはじめとして、塔身といった部分が存在せぬことである。先述よりの諸氏の考察の如く、塔全体が大日如来の抽象化によるものであり、そこには当然のこと仏像的なものは彫刻されず、東西南北の四面にそれぞれ東方発心門（キヤ・カ・ラ・バ・ア）西方菩提門（キヤー・カー・ラー・バ・アー）南方修行門（ケン・カン・ラン・パン・アン）北方涅槃門（キヤク・カク・ラク・バク・アク）の四門の梵字が刻まれているにすぎない。いづれにしても五輪塔と他の仏教諸塔とその形式を比較検討する時、五輪塔は各部分を最大限に省略したもののように考えられる。

三

村田治郎氏はチベット語訳の藏経中、つまり、善畏訳の⁽²²⁾「仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌」の中に五輪図形のあることに着目され、その根元は印度にあるのではないかと示唆された。藪田嘉一郎氏も、中⁽²³⁾国における五輪図形と題して、「善無畏が開元十三年に大日経を漢訳したときに経意を講説したのを弟子の一行がノートしたという大日経疏卷第十四、字輪品、秘密曼荼羅品にこれ

を説いて詳密である。また慈氏菩薩略修愈譏念誦法、尊勝仏頂修瑜伽法儀軌、三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法、等には五輪図形を示して説いている。もっとも今本の図は原のままかどうかは疑問である。とにかく唐代に五輪図形が知られていたことは確かである。」と述べられ、五輪の思想が唐の玄宗時代に存在していた事を確認されている。齊藤彦松⁽²⁴⁾氏も「五輪塔内容と系列の研究」と題して「五輪塔の成立過程に於ける内容はA、五大、B、一神、C、祭火多神、D、五句真言で、五輪塔成立後は各時代の各地域思想信仰を反映しつつ新たな内容が附加されて来た。」と。更に、「仏教美術にあらわれた古代娑羅門教祭火炉形の美術史的研究」のもと、日本印度学仏教学研究第五卷第一号に、「五輪塔の成因は形式・内容ともに仏教以前の婆羅門教の中で成育した。形式は祭火炉形で、内容は五大思想である」と言い「五輪塔は七世紀頃に印度に於て成立したものと推定する。」と、同様印度から中国の唐代へ続いて日本へと「醍醐寺五輪塔の美術史的研究―日本製立体五輪塔の成立問題を含めて―」の論文を通じてその学問的位置と価値、役割の解明についてを主張せられている。印度や中国方面において五輪塔の思想的基礎が出来たと言う事は、昔日より文献の上で知られるところであるけれども、その実在性については万人の認めるところではない。やがてこの問題も大陸部での実存資料の存在により

解消せられることであろうが、ここでは特に斯かる意味からして従来の先人の業績をもととして、日本における五輪塔の発生分布について考察してゆきたいと思う。

日本最古の五輪⁽²⁶⁾の名称として、金剛峯寺修行縁起や日本高僧伝要文抄の弘法大師伝に、「七七の御忌辰に及んで門弟等御体を見奉るに、顔色衰えず、鬢髪更に長ぜり、之に因つて剃除を加え、衣裳を整え、石壇を疊む、壇の広さ人の出入するばかりなり。石匠をして五輪卒都婆を安ぜしむ、種種の梵本陀羅尼を入る、其の上に更に亦た宝塔を建立し、仏舍利を安置せり、其の終制真然僧正一向に之を営めり」と承和二年(八三五)入寂の弘法大師の墳墓に五輪卒都婆を安置したと言ふ記事がある。しかしこの両者の伝記中には、平安末期に書き加えられたふしがあり、古伝による石壇上の宝塔の説が有力視されるので信用するにあたわずと藪田氏は主張せられている。次いで五輪卒都婆⁽²⁷⁾が文献的に出現するのは安祥寺資財帳仏菩薩の項、ならびに下寺堂院の項に記載されているところの二項である。つまり、「毘盧舎那五輪卒都婆云々」と言ふ文字である。資財帳の奥書には貞観十三年(八七二)八月十七日の年号があるも、やはり五輪卒都婆ではなくして多宝塔形式のものであったと足立康氏が考証せられている。この書は至徳二年(一三八五)更に文政二年(一八一九)の二回にわたり書写されている事がわかり、宝塔を五輪塔と後世書き換え

たものではないかと思われるふしがあると言われる。もっとも高野山の塔が多宝塔の形式をとって、胎蔵の大日如来や四仏を祭り、これを弘法大師は毘盧舎那法界体性塔とよんでおられ、五大(五輪)よりの形成物と念じていたので、その立場より多宝塔を五輪塔と準じて考えられていた場合もあり得たと考えられる。次いで延長八年(九三〇)醍醐雜事記中に見える醍醐天皇陵の卒都婆三基や、長元九年(一〇三六)の左経記に見られる石卒都婆も現在言われる五輪塔形の卒都婆ではなさそうである。わが国で現在のところ一番古き五輪塔として著名なものに、京都市醍醐寺慶長十年十二月二十一日に焼失した、御影堂の焼跡の土壇の上部より掘出された石櫃内の銅製の五輪塔がある。銅を薄く伸して、しかも彩色を施し、幅四寸一分、内部は滅金してその上に真言陀羅尼を墨書し、実に巧みなものと言われている。醍醐寺新要録に一本願御骨石櫃事として、⁽²⁹⁾「火輪は非如常、皆三角也、誠叶理者也、但今度始而見了、赤色ニ塗ル、余輪各色ニ塗ル、是モ始而見了、水輪ノ内ニ経アリ、銅ヲ薄ク伸テ、紙ノ如クシテ、高サ四寸一分、中ハ滅金、其上ニ真言共ヲ墨ニテ書付之、卷了、大日如来真言、光明真言、無垢浄光陀羅尼、宝篋陀羅尼、菩提莊微陀羅尼、大随求即得衰羅尼、善炬如来破地獄真言……。」と述べられている。石櫃には⁽³⁰⁾応徳二年(一〇八五)の銘があり、五輪塔は石櫃と同じものと考えられるので、これが正しけれ

ば、立体的な形としての日本最古のものとして考えられる。

(ただし一部において再考察をすべき点がありと、昭和四十一年、

雄山閣版、仏教考古学講座「墳墓」の項二十二頁にて、和田千吉氏

が時代考証的に批判を下されている。)保安三年(一一二二)に建

立された京都市白河小塔院の鍔瓦(軒円瓦)の五輪塔形文様の

発見も、五輪塔起原の学者たちにとっては多大の関心をもつ

て論議された。氏は「兵範記に所謂五輪石塔婆として作られ

たものであるし、法勉寺の瓦当瓦版に付せられた五輪図形は、

これが保安三年(一一二二)四月二十三日に供養された小塔院

に属する限り、五輪塔として作られたものであるに相違ない。

また同時代に各地に散在する五輪石塔も右から推してこの範

疇の中に入るものである。更にこれより先き応徳二年に作ら

れたと推量せられる醍醐寺円光院址本願御骨石櫃内銅製五輪

も、その地輪内に遺骨が納められていたのであるからまさに

五輪塔であったのである。このように五輪塔というものが出

現したのであるが、これをどう説明したらよいか。私はこの

理由を次のように算える。第一は五輪図形を塔婆と観じるこ

との強調、第二は浄土教特に真言浄土教の興起と、それが第

一の観念を利用したこと。大体以上のようなものであると考える。

第一についてはすでに述べた。第二は五輪塔の出現と真言浄

土教の興隆が時期的に一致すること、また思想的に通じるこ

とから考えられる。尚、第一は第二によって更に強調せられ、

「確固たるものになったのである。」と、かかる主張のもとに、

当五輪塔の正当性の解明に尽力せられたのであった。村田次

郎氏は、富山房発行国史辞典(昭和十八年)の石田茂作氏の文

面を紹介すると共に、「それは起原は詳かでないが、宝蓋を

具する舍利瓶の形に則とり、その各部に地水火風空の五大思

想を当てはめたものと思われる。五輪五大に関しては密教儀

軌に既にあるが、これを塔婆と結びつけたのは藤原時代末期

と察せられ、保安三年造立の法勝寺鍔瓦の文様に見られるそ

れは、恐らく五輪塔として最古の形であろう。」というので

ある。この文章の「塔婆」とあるのが何を意味するのか、よ

く判らないので論旨の理解を混乱させるが、仮りにこれを五

輪塔形のことと解するならば、話のスジは一応すっきりして

くる。つまり密教儀軌に基いて五輪塔形が発生したこと、そ

の五輪塔形の基になったのは天蓋をもつ舍利瓶であることの

二点に要約できる。もちろん右の記事に対しては、藤原時代

末期という年代観にも異論があるだろうし、さらに天蓋ある

舍利瓶の先例(例えば五重塔内陣の塑製舍利瓶、法隆寺東院夢殿の

屋頂、室生寺五重塔の相輪頂上)は、五輪塔の形に近似してい

ると言い難いのではなからうかという疑問もあるだろうが、

それにも拘らず、石田さんが五輪塔形を日本で発生したとい

う見解をとられたところを私は重視したのである。」と、

その立場に深く共鳴せられたのである。もちろん、この立場

に反対し批判をした人々もあった。その一人に石田尚豊氏が
いる。⁽³⁴⁾氏はこの五輪関連の文化は重源をバックとした「三角
錐形の火輪の源流は宋にある。」と言う説を中張せられたの
である。(MUSEUM 73号)

他面、佐々木利三氏⁽³⁵⁾は川勝政太郎氏の説を引用せられ「川
勝氏は京都岡崎廃寺法勝寺址より発見された軒丸瓦、軒平瓦、
瓦当に現されたものを注意せられその型式が水輪に於いて五
輪塔ならざる即ち円形ならざるもの存することを云われて
いる。これが保安三年に建立された同寺小塔院に使用された
ものとして考へられてゐるから、此頃一方に水輪の円形なる
五輪塔形が出来てゐたとしても、尙未だ定型と成つてゐな
ったのであろう。同氏は、「型式学的に見れば、ここに所謂
五輪塔形の成り立ちを見るべきことを示唆するものがあるや
うに思はれるのである」と、含蓄に富んだ見解を示してゐら
れる。五輪塔成立に関する確答を避けられているのが印象的
である。更に、池上年氏は⁽³⁶⁾一九六六年著書「古石塔の根元」
において、「多くの五輪塔は肩が張っているが、これは下張
となつている。これと一と組となつている軒平瓦に、頸のつ
いた瓶状のものがある。それは宝瓶塔の名残りを存するもの、
中尊寺願成就院原始五輪には大きな頸のくびれがついてい
る。それはその祖形を存するものと考へられる。」と、前者と関
連性のある旨を述べている。その後黒田昇義氏⁽³⁷⁾は五輪塔の定

形期問題に触れられて、昭和十六年十二月竜谷史壇第二十八
号の「五輪塔の成立」の佐々木利三氏の論文中より引用され、
「康治二年(一一四三)に入滅した覚鑿の「五大五輪自身成仏
図」や「金剛頂経蓮花部心念誦次第沙汰」には現塔形を以て
説かれてゐる事から、この頃がいま見る五輪塔の定形期であ
らうと推論している。多少疑問の点は残るが、この立場の一
理ある事を示唆されている。平安初期の瓦製五輪塔として兵
庫常福寺藏⁽³⁸⁾の天養元年(一一四四)のもの、また、神戸市中
山手通り徳照寺藏旧成身院内の長寛二年(一一六四)造製の梵
鐘に鑄出された五輪塔形などは、多少風輪になまりはあるも、
全体的に見て平安後期の落付のある形態をよく示している。
現実の上から言つて、確実に一番古いと思われる文献での五
輪塔は、仁安二年(一一六七)に近衛基実の遺骨を浄妙寺に埋
葬し、その上に五輪塔を建立した事によると言われる。「平
信範の日記「兵範記」の仁安二年(一一六七)七月廿七日条に、
近衛基実の遺骨を木幡浄妙寺に埋葬することを叙して、先穿
穴……次奉殯穴底……次埋土、其上立五輪石塔……と記し、
埋骨せる上の地上に五輪石塔を立てたことが知られる。現実
に五輪石塔を造つた確かな例として今私の知つてゐるのは、
これが一番古い。しかし、その五輪石塔は今如何になつたか
存在を知らぬ。洛南木幡の藤原氏一門の墓所はなほ累々たる
土饅頭を見るが、その何れが誰れの墳たるや知られぬ程であ

る。けれども此の、「兵範記」の記載の如くんば、平安時代五輪石範の断片でも見出されさうな気がする。或は将来発見されることもあるかも知れない。」と、川勝政太郎氏は遺蹟の事々は別として、文献の上から真実性を暗示すると共に、その可能性を指摘せられている。前者、仁安二年の五輪塔の存在を立証すべき有力なる立場として、学会の中心話題となつたものに、仁安四年(一一六九)の五輪石塔がある。岩手⁽⁴⁰⁾県の中尊寺の一角、釈尊院の墓地に存するものである。高さ五尺二寸からなる雄大なる五輪塔である。水輪に見られる頸部や四方仏種子などから宝塔と見る説もある。この塔には年号が刻まれているが、この点が特に重要性を持つ所以である。次いで翌年の嘉応二年(一一七〇)大分県中尾の五輪塔も空輪を欠いているものの、地水火風の四輪にそれぞれの種子が刻まれているので(通常の四門配当の梵字ではなく、一方に五転の阿字「胎藏五仏」他の三面に大日如来の真言を配している。)全体の形式より見て異形の五輪塔であろうと考古学雑誌第六卷第十号に天沼俊一氏が述べられているところより、前者釈尊院の五輪塔に続く五尺に近い(空輪を入れれば五尺八寸はあろうと、池上年氏は述べている。)大形の塔として学術上希少価値を所持している。次いで承安二年(一一七二)同所在の五輪石塔も大日法身真言の体を現わし、天沼氏によれば兵庫県須賀院経塚出土のものと同系であり、三尺三寸からのもので、地輪の背

が高く、大日如来の真言を多く用いた種子所持した著名なるものと言われている。平安末期のものは必ずしも畿内を中心としたところばかりではなく、福島⁽⁴³⁾県石川郡岩法寺五輪坊墓地にも、一部、風・空輪が欠けているもの、平安から鎌倉の過渡期を示すものと思われる。地輪に治承五年(一一八二)の刻銘のある凝灰岩からなる五輪塔である。平安時代の末期になると玉葉⁽⁴⁴⁾や山槐⁽⁴⁵⁾などの文献に見えてくる如く、元暦二年(一一八五)には後白河法皇の五輪塔八万四千基供養などの事々が現われてくる。平安時代の後期に五輪塔が造成されるとは言え、未だ未だその分布状河は到って少なく、同塔が徐々に数を増したのは鎌倉時代に入ってからである。鎌倉時代の初期においてもその形式は、前時代の維持したものが割に多く、群馬⁽⁴⁶⁾県吾妻郡の五輪塔や、建久八年(一一九七)山口県佐波牟礼村阿弥陀寺藏鉄塔中に安置されている水晶五輪舍利塔などもその系統を引くものと言われている。当時錫杖の頭部に護身として塔を刻まれた事があり、埼玉⁽⁴⁷⁾欲喜院の建久八年(一一九七)欲喜天二童子錫杖の頭部にも五輪塔が刻まれている。

元来、五輪塔の正形は前述の如く方・円・三角・半月・宝珠形の五輪より成立っているのであるが、三重⁽⁴⁸⁾県阿山郡在の新大仏寺藏、建仁三年(一一〇三)の国宝板彫五輪塔は板彫ではあるが、五輪塔の模範的好資料とせられている。

四

平安時代の五輪塔は後期に集中しその分布も比較的小範圍に留まった。形態概要としては、地輪の背刈くして水輪は球形と言うよりもむしろ瓶的な感じをなし、空輪に団形を有する全体的に平安的な落付と安定性を保持している。鎌倉時代に入るや五輪塔の製作も多くなり、地輪も徐々に前時代にして高さを増し、水輪は球形をなし空・風輪は多少大きくなった。鎌倉時代の末期になると技工的にも洗練さを増し分布も拡大してゆくが、逆にかつての豪華さを失う嫌いが生じてくる。他面鎌倉期の特徴として、五輪塔を板状化してやや長目にした形式のものや、五輪塔の地輪部を方柱状に長くした形式のものなど、一石彫成の五輪塔が出現するようになった。室町時代に入ると益々布及発展の度を加え、墓塔や追善供養塔として用いられる事になった。それだけに各層への侵透はめざましく、五輪塔の小形化を招くばかりでなく、一石彫成の簡易塔の出現に拍車をかけるに到った。塔に法名や俗名、施主と年月日を入れる必要性が生じてくると文字の書入れのため、しぜん塔身となるべきところが長くなるなど、庶民の需要によって塔形も変らざるを得なくなった。

井川定慶⁽⁵⁰⁾氏も「塔婆の研究」中において、塔形変化の条件とその理由にふれて、「僧侶に多く用ゐらるるものは上部の

空大（如意宝珠形）が長大となり、俗家のものは概して中央の水大（球円形）若しくは下部の地大（方形）に法名が刻まれるやうに発展して上部は石塔の冠蓋のやうになってしまった。また僧侶の上部如意珠の発展したものが偏平となり、下部が今日の蓮台等の承け石で積まれて今日多く見る石塔形になったのではあるまいか。」と、もっともらしい立場を述べられている。

江戸時代の五輪塔はもはや一般的の存在となり、殆んどの墓地において見かけることが出来る。昔日に比して豪壮な重みのあるものはなく、梵字なども狭小にして退歩そのものの観を示している。もっとも現在の五輪塔のみを見たのでは、この言葉の意義を解する事は無理かも知れぬが、今後比較検討考察しての問題である。

引用・参考文献

- (1) 池上年著「旭村古墳塔の根元」昭和四十一年岡崎美術研究所発行 六七頁
- (2) (イ) 那須政隆著「五輪九字秘釈の研究」昭和四十五年鹿野苑発行 一七〇頁
(ロ) 和田謙寿著「日本仏教習俗と教線拡張の研究」昭和三十七年駒大出版社発行 二十二頁
- (3) 佐々木利三著「五輪塔の起原」昭和三十三年綜芸舎発行 五十一頁
- (4) 佐々木利三著 同 右 十三頁

- (5) 川勝政太郎著「五輪塔の起原」昭和三十三年綜芸舎発行 二頁
- (6) 川勝政太郎著 同右 三頁
- (7) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」昭和三十三年綜芸社発行 八十四頁
- (8) 「日本石仏事典」昭和五十年 雄山閣発行 三〇一頁
- (9) 跡部直治著「歴史公論」第四卷第七号中 雄山閣発行 七十六頁
- (10) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 前述 一二九頁
- (11) 村田次郎著「五輪塔の起原」 右同 四十一頁
- (12) 村田次郎著「五輪塔の起原」 右同 四十三頁
- (13) 石田茂作著「塔婆の研究」昭和十八年鶴故郷舎発行 一二八頁
- (14) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 前述 五十八頁
- (15) 齊藤彦松著「印度学仏教学研究」第五卷第一号 一六五頁
- (16) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 前述 五十五頁
- (17) 池上年著「旭村古墳塔の根元」 前述 八十一頁
- (18) 齊藤彦松著「印度学仏教学研究」第六卷第二号 一〇八頁
- (19) 齊藤彦松著「印度学仏教学研究」第八卷第一号 一八三頁
- (20) 齊藤彦松著「印度学仏教学研究」第十五卷第一号二二三二頁
- (21) 池上年「旭村古墳塔の根元」 前述 六〇頁
- (22) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」昭和三十三年綜芸社発行 六十六頁
- (23) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 右同 六十五頁
- (24) 齊藤彦松著「印度学仏教学研究」第八卷第一号 一八二頁
- (25) 齊藤彦松著「印度学仏教学研究」第十五卷第一号二三一頁
- (26) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 前述 一〇三頁
- (27) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 前述 一〇五頁
- (28) (イ) 圭室諦成著「葬式仏教」昭和三十九年大法輪閣発行 一九〇頁
- (29) (ロ) 佐々木利三著「五輪塔の起原」 前述 十七頁
- (イ) 和田千吉著「考古学講座」昭和十一年雄山閣発行 二十二頁
- (ロ) 黒田昇義著「五輪塔の起原」 前述 二十六頁
- (ハ) 「日本石仏事典」 前述 雄山閣版 三〇二頁
- (30) 川勝政太郎氏・石田茂作氏・村田治郎氏・佐々木利三氏が「五輪塔の起原」一四頁・三十二頁中にそれぞれ述べられている。
- (31) 「歴史公論」第四卷第七号 雄山閣版 五十二頁
- (32) 藪田嘉一郎著「五輪塔の起原」 前述 一〇七頁
- (33) 村田次郎著「五輪塔の起原」 前述 三十二頁
- (34) 村田次郎著 同右 三十三頁
- (35) 川勝政太郎著「平安時代の五輪塔」古代文化昭和十六年・第十二卷第十六号
- (36) 池上年「旭村古墳塔の根元」 前述 八十四頁
- (37) 黒田昇義著「五輪塔の起原」 前述 二十五頁
- (38) (イ) 村田治郎著「五輪塔の起原」 前述 三十一頁
- (ロ) 「日本石仏事典」 前述 雄山閣版 三〇三頁
- (39) (イ) 芳賀登著「葬儀の歴史」昭和四十五年雄山閣発行 八十四頁

- (39) 川勝・佐々木・藪田三氏が「五輪塔の起原」中に兵範記の内容を紹介している。六頁・十八頁・八十四頁・一〇六頁
- (40) 黒田昇義・川勝政太郎著「五輪塔の起原」 前 述 二十九頁・六頁
- (41) (イ)池上年著「旭村古墳塔の根元」古石塔の根元の項 八十四頁
 (ロ)和田千吉著「仏教考古学講座」墳墓の項 二十四頁
 (ハ)川勝政太郎著「石造美術」昭和十四年京都スズカケ出版 一〇三頁
 発行
- (二)「歴史公論」墳墓の項 第四卷第七号(昭和十年) 五十二頁
- (42) (イ)池上年著「旭村古墳塔の根元」古石塔の根元の項 八十四頁
 (ロ)川勝政太郎著「石造美術」 前 述 一〇四頁
- (43) 川勝政太郎著「五輪塔の起原」平安時代の五輪石塔の項 一〇頁
- (44) 「玉葉」元暦二年六月二十四日・八月二十一日の条
- (45) 「山槐記」文治元年八月二十三日の条
- (46) 和田千吉著「仏教考古学講座」墳墓の項 二十五頁
- (47) 池上年著「旭村古墳塔の根元」 前 述 七十四頁
- (48) 川勝政太郎著「石造美術」 前 述 一〇一頁
- (49) 川勝政太郎著「石造美術」 右 同
- (50) 井川定慶著「塔婆の研究」昭和十八年鷗故郷舎発行 一五七頁